

動詞語彙概念構造と統語操作

——既存性の概念と島の効果の関係を例に⁽¹⁾——

野 川 健 一 郎

1. はじめに

本稿では、語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure) に現れうる因子が統語現象に与える影響について考察する。具体的には動詞の語彙概念構造に出現する項がもつ「既存性 (pre-existence)」という極めて語彙意味的な特性が、「島」からの抜き出しという統語現象に及ぼしている影響を明らかにする。

構成は以下の通りである。まず、島からの抜き出し現象に対する従来の統語的あるいは意味的分析を挙げ、それらにとり問題となる事実、すなわち結果者目的語が wh 島から抜き出されると強い非文法性が生じることを指摘する。続いて、Nogawa (2001) における分析を取り上げ、そこで提案されている「既存性の条件 (Pre-Existence Condition)」を概観する⁽²⁾。それをもとに、Nogawa (2001) での分析が、語彙部門と統語部門との関係を正しく捉えようとする際にもつ意味合いを考察していく。

2. 島の効果とその分析

2.1. 先行研究

様々な島 (island) から wh 要素を抜き出した場合、非文法性が生じる場合があり、これを「島の効果 (island effect)」と呼ぶ。島には、subject island や adjunct island など強い非文法性を示す効果をもたらす (強い) 島と、wh 島 (wh-island) や negative (inner) island など弱い効果をもたらす (弱い) 島とがある。

島の効果を生じさせる要因を分析していくにはいくつかの接近法が可能であり、それらのうちのいくつかは従来の研究において進められてきた。まず、島の効果を抜き出された wh 要素の移動起点 (痕跡) に求める方法、第二に wh 要素が抜き出される島自体の特性から導き出す方法、第三に移動操作自体に着目して解明していこうとする方法である。

第一の接近法としては、Rizzi (1990) の空範疇原理 (Empty Category Principle : ECP) に基づく分析などが挙げられる。Rizzi は統合的 (conjunctive version of) ECP を以下のように提案し、移動痕跡は適切な主要部統率 (head-government) を受ける必要があることを提案した (Rizzi (1990: 87))。

(1) ECP : A nonpronominal empty category must be properly head-governed.

しかし、Rizzi のこの分析では補部と付加詞が共に主要部統率を受けることになり、島の効果における両者の非対称性 ((2, 3)) を ECP に還元できず問題となる。

(2) *Wh*-Island Effect

- a. ?Which problem₁ do you wonder [how₂ [to solve t₁ t₂]]?
- b. *How₁ do you wonder [which problem₂ [to solve t₂ t₁]]?
- c. ?What₁ does John wonder [whether Mary bought t₁]?
- d. *How₁ does John wonder [whether Mary fixed the car t₁]?

(3) Negative Island Effect

- a. John didn't solve the problem that way.
- b. *How₁ didn't John solve the problem t₁?
- c. How₁ did John solve the problem t₁?

この問題に対する Rizzi (1990: 3.5, 3.6) 自身の解決法は、移動要素の意味側面に着目し、動詞後続要素を「項 (argument)」(すなわち補部 (complement)) と準項 (quasi-argument) と付加詞 (adjunct) からなる「非項 (non-argument)」とに分け、それぞれに対して二つの異なる道具立てをするものであった (cf. Cinque (1990))。具体的には、意味役割 (θ -role) に「指示性 (referentiality)」という概念を導入し、①指示的 (項的) 意味役割と②非指示的 (準項的) 意味役割とに分け、項と非項の非対称性を捉え直すのである。①は動詞により表される事象 (event) において参与者 (participant) を表す、選択された要素に与えられる意味役割であり、従って項は指示的意味役割を付与される。他方②は、準項 (quasi-argument) や語彙的に選択されている副詞的要素に付与される意味役割である。従って、「非項」は非指示的意味役割を付与される (準項や語彙的に選択されている付加詞の場合) かあるいは意味役割を全く付与されない (語彙的に選択されていない付加詞の場合) ということになる。

以上のことを前提に Rizzi は指示的意味役割を担う要素をそれ以外の要素 (すなわち非指示的意味役割を担う要素と意味役割を全く担わない要素) から分離し、それぞれの *wh* 要素とその痕跡との「長距離依存の関係」に対する二つの異なる道具立て (制約) を提案する。前者、すなわち指示的意味役割を担う *wh* 要素の移動に関しては指示指標 (referential index) の束縛関係 (binding relation) が、後者、すなわち指示的意味役割を担わない *wh* 要素の移動に対しては統率の鎖 (government chain) ^{(3), (4)} が提案された。

以上のような Rizzi (1990) の分析には、理論的および経験的な問題や再考察を要する点はいくつかある。第一は、意味役割に対してその指示性を問うという奇異な想定をする必要があること。第二は、同じ *wh* 移動という一つの操作に対して、(移動要素の種類により) 二つの異なる道具立てが必要となることである。さらに、生成文法の原理とパラメタ理論が、統率・束縛理論から極小主義理論に基づくものへと理論的「昇華」を起こした。これによりそれまでの統語概念の存在が再検証されるようになったため、旧理論内の統語概念であった統率や障壁に基づく Rizzi の分析も再検討する必要がある。以上の理論的な問題点に加え経験的な問題も

ある。「指示的」と考えられる補部であっても、wh 島からの抜き出しで強い非文法性を示す事例があり、それは Rizzi の分析では説明がつかない (2.2節参照)。

第二の接近法、すなわち wh 要素が抜き出される島自体の特性から島の効果を導き出す方法には、Bower (1987) などによる統語論的分析もあるが、以下では意味論的・認知論的分析方法を採用ものを取り上げて検討する。意味論的分析には Nakau (1981), Kuno (1987), Takami (1989), Hirose (2002) などがある。中でも Nakau (1981) は、先行研究において様々な条件として分析されていた現象を以下のような Anaphoric Island Constraint (以下 AIC) のもとで統一的に分析している。⁽⁵⁾

(4) Anaphoric Island Constraint (informal statement)⁽⁶⁾

No element contained within any anaphoric domain whose component is either an NP or S (S') can be extracted from that domain by a transformation.

(5) Anaphoric Marking (illustration)

- a. Definite NP, general NP, factive S, “affected” NP, marked [+anaphoric]
- b. Indefinite NP, cataphoric NP, various types of S, among others, may be marked [+anaphoric] only contextually.

これから明らかとなるのは、Nakau の提案する AIC が言語表現自体 (特に語彙) がもつ意味特性によるのではなく、高度に談話依存的な性質を帯びているということである。さらに Nakau (1981) の分析で重要な点は、そこで考慮されている意味特性が wh 要素が抜き出される領域 (島) のそれ (のみ) であることである。これに従えば、同一種の島から異なる種類の要素が抜き出されても同じ島の効果が見られることを予測する。しかし次節で見ると、実際には予測に反し異なる効果を示す現象が観察され、何らかの説明が必要とされることになる。

第三の接近法、すなわち移動操作自体に着目して島の効果を解明していこうとする分析方法は、生成文法における統率・束縛理論から極小主義理論への理論的変遷によりもたらされた帰結でもある。それまでの理論および理論内操作の簡略化が進められていく過程で、移動にかかる制約も痕跡にかかる独立した原理 (ECP) を立てることで説明するのではなく、移動操作 (すなわち Move) という操作自体の性質から直接導き出されるものであると分析されるようになった。確かに移動操作自体の性質が wh 要素の長距離移動を制限するものであるように定義されれば、島の効果の説明はある程度可能なものとなるだろう。しかしながら、次節において見ていくような言語事実はその説明範囲から漏れてしまうことは確実である。⁽⁷⁾

2.2. 結果者目的語⁽⁷⁾

本節で見ると先行研究で問題となる言語事実は、2.1節で概観した先行研究のいずれによっても説明不可能なものである。それは創造動詞 (effect verb) が選択する結果者目的語 (resultant object: 以下 RO) ((6)の斜字体部) の島からの抜き出しである。

- (6) a. Mary painted *some pictures*.

b. Bill wrote *a letter*.

問題の所在を明らかにするため、結果者目的語と被動者目的語 (patient object (以下 PO): affect 動詞の目的語) のいずれをも選択できる動詞を取り上げる。RO も PO も選択できる動詞で検証してみると、PO も RO も共に (長距離の) wh 移動は可能である ((9, 10))。しかしながら、wh 島から抜き出した場合には文法性に違いが生じる ((11, 12))。すなわち、RO の場合は (若干文法性は落ちるものの) 抜き出し可能だが PO の場合は強い島の効果が生じるのである。

- (7) a. John dug the ground. [PO]
b. John dug the small holes in the ground. [RO]
- (8) a. Mary painted the wall. [PO]
b. Mary painted a beautiful picture on the ceiling. [RO]
- (9) a. What_t₁ do you think [that John dug t₁]? [PO]
b. What_t₁ do you think [that John dug t₁ in the ground]? [RO]
- (10) a. What_t₁ do you think [that Mary painted t₁]? [PO]
b. What_t₁ do you think [that Mary painted t₁ on the ceiling]? [RO]
- (11) a. ??What_t₁ do you wonder [whether John dug t₁]? [PO]
b. *What_t₁ do you wonder [whether John dug t₁ in the ground]? [RO]
- (12) a. ??What_t₁ do you wonder [whether Mary painted t₁]? [PO]
b. *What_t₁ do you wonder [whether Mary painted t₁ on the ceiling]? [RO]

まず、論理的な想定として、PO も RO も共に動詞主要部により主要部統率されており、共に動詞を下位範疇化し、Rizzi が言うところの指示的意味役割を動詞により付与されていると言える。従って Rizzi の分析によれば RO の島からの抜き出しは ECP の観点からは全く問題ないはずである。⁽⁸⁾同様に、Nakau (1981) のような意味的分析でも、抜き出される島が同一種の wh 島であるため、PO-RO の非対称性は全く説明がつかない。さらに、近年の極小主義に基づく分析を採ったとしても、何らかの方法で、移動要素自体の性質 (それも極めて意味的な性質) に言及することなしには、この PO-RO の非対称性は説明不能である。

3. Nogawa (2001)

PO-RO の非対称性を手がかりに、wh 島からの抜き出しに対する分析の第四の接近法が見出される。それは抜き出される wh 要素自体 (特にその意味側面) に焦点を当てるものである。2.1節でも触れたように、Nakau (1981) などの意味的分析では、抜き出される移動要素自体の意味的側面は分析の対象とはなっていない。そしてそれらの分析では2.2節で見た PO-RO の非対称性を十分に説明することはできない。むしろ十分な説明がなされるために必要とされるのは、抜き出される要素自体に関する意味論的分析なのである。

Nogawa (2001) で採られた意味論的分析方法では、RO と PO の非対称性を説明するため、

移動操作を受ける両者の意味側面に着目しその原因を求めた。そこで着目された意味側面とは、抜き出される要素が担う意味役割の「既存性 (pre-existence)」という概念である。既存性の概念は Nakau (1989) (cf. 中右 (1994)) に従い以下のように定義される。

- (13) An entity is pre-existent, and the expression describing that entity forms a pre-established (or inherently anaphoric) domain if and only if it is perceived, with respect to the associated situation, to be present there in advance of the occurrence of that situation. (Nakau (1989))

(13)によれば、既存的存在物の典型例は PO の指示対象であると言える。PO は主語行為者が遂行する行為の標的 (target) であり、仮に場面において予め存在していない (既存的でない) とすると行為の遂行自体が不可能となり、言語表現は意味を失う。他方 RO の場合、その指示対象は非既存的であると言える。というのも RO は動詞により表されている行為に先立ち存在してはならず、行為の結果として生じるものであるからだ。

ここで重要なのは、PO と RO との本質的な差異がこの既存性という意味上の差だけである点だ。両者は共に名詞句という統語形式をとり、共に真の動詞補部であり、しかも Rizzi の言うところの指示的意味役割を担っている。よって、PO-RO の唯一の意味的差異である (非) 既存性が、島の効果を決定する因子であると考えられる。この点に着目し Nogawa (2001) では島からの抜き出し可能性について以下の「既存性の条件 (Pre-Existence Condition)」が提案された。

- (14) Pre-Existence Condition (to be revised)

A *wh*-constituent can only be extracted out of a *wh*-island, if it is the type of constituent which refers to an entity which is taken to be *pre-existent*, in the sense defined in (13), with respect to the described event.

(Nogawa (2001: 37))

(14)の既存性の条件により、島の効果における PO-RO の非対称性は説明がつく。具体例を挙げてみる。(13)の定義により、PO は既存的参加者の意味役割を担う。当然ながら、(7a, 8a) の the ground と the wall は行為に先立ち存在する (既存的)。他方、RO は非既存的参加者の意味役割を担う。(7b, 8b) の例においては the small holes と a beautiful picture は行為の結果創造され出現する。よって既存性の条件は PO の島からの抜き出しを許し、RO の抜き出しを阻止する。⁽⁹⁾

既存性の条件は、RO の他にも出来事目的語の島からの抜き出しの際に見られる強い非文法性をも説明することが可能である。軽動詞 (light verb) が選択する (義務的) 補部で出来事を表す「出来事目的語 (Eventive Object)」(以下 EO) がある。

- (15) a. Bill's having *an argument*.
b. Mary makes *a dash*.
c. Michael took *a long walk*.

d. José gave a big laugh.

EOは名詞句という統語形式をとり長距離wh移動も可能である((17))が、(18)のようにwh島からは抜けない。

- (16) a. John took a (long) walk after he finished his homework.
b. John gave a laugh during his speech.
- (17) a. How long a walk₁ do you think [that John took t₁]?
b. What kind of laugh₁ do you think [that John gave t₁ during his speech]?
- (18) a. *How long a walk₁ do you wonder [whether John took t₁]?
b. *What kind of laugh₁ do you wonder [whether John gave t₁ during his speech]?

既存性という観点から見た場合、EOは既存的参与者たりえないと言える。EOの表す指示対象は単なる行為の遂行事例(instance)だけであり、従って遂行事例が行為遂行自体に先立って存在することは不可能なのである(cf. Nakau (1989), 中右 (1994))。すなわち、EOは先行する軽動詞から意味役割を付与されていたとしても、その意味役割は非既存的であり、既存性の条件(14)がEOのwh島からの脱出を正しく排除することになる。

ここで、既存性の条件におけるevent(事象)の概念をより厳密に定義するため、結果構文における動詞後続名詞句の島からの抜き出しの事実を検証してみる。結果構文は、そこに含まれる動詞の種類により、他動詞結果(Transitive Resultative: TR)構文と非能格動詞結果(Unergative Resultative: UR)構文とに分けられる⁽¹⁰⁾。

- (19) Transitive Resultatives:
a. He wiped the table clean.
b. He watered these tulips flat.
- (20) Unergative Resultatives:
a. The clock ticked the baby awake.
b. She laughed the man off the stage.

両構文における動詞後続名詞句(目的語および疑似目的語)は共に統語的には同じ動詞後続位置を占めている。さてwh島の効果を両構文の動詞後続名詞句について観察してみると、以下のように明らかにUR構文の方が文法性において劣る⁽¹¹⁾。

- (21) a. ?Which tables₁ do you know why₂ he wiped t₁ clean t₂?
b. Which tulips₁ do you know whether he watered t₁ flat?
- (22) a. *Which baby₁ do you know why₂ the clock ticked t₁ awake t₂?
b. *Which men₁ do you know when₂ he laughed t₁ off the stage t₂?
- (Rothstein (1992: 130))
- (23) a. ?Which people do you wonder whether he punched senseless?
b. ?Which counter do you wonder whether the cook wiped clean?

- (24) a. ??Which pavements do you wonder whether they ran thin?
 b. ??Which neighbors do you wonder whether the dog barked awake?

(Levin and Hovav Rappaport (1995: 47))

まず結果構文の概念構造 (Conceptual Structure) について考えてみる。結果構文により表される事象構造 (Event_{RC}) は(25a)のように、(両構文共に) 二つの異なるそして連続した下位事象 (sub-event), すなわち動詞が記述する事象 (Sub-event₁) の「行為 (activity)」と動詞後続名詞句が RP と主述関係にはいることで記述する事象 (Sub-event₂) の「結果状態 (result state)」からなる複合的な内部構造をもつ。しかもその二つの下位事象が一つの構文型(25b)に畳み込まれていると言える (Levin and Hovav Rappaport (1995: 50))。

- (25) a. Event_{RC}: Sub-event₁ → Sub-event₂
 b. NP V NP RP (RP = resultative predicate)

さて、(14)にある event の概念を結果構文の表す事象全体に広げてしまうと、両構文における動詞後続名詞句は既存性という観点からは区別できなくなるのであった。というのも、TR 構文の目的語も UR 構文の疑似目的語も、結果構文の表す事象内では共に既存的であると見なされるからである。この理由は第二下位事象にある。第二下位事象は結果状態を表しており、その中における「主語」名詞句 (統語上の目的語) は必然的に既存的で見なされるからである。TR 構文、UR 構文の目的語指示対象は、結果構文により記述されている世界において共に既存的存在となっている、ということになるのだ。よって(21-24)に見られる文法性の差は(14)の既存性の条件では説明できない。そこで(14)における event の概念を精緻化し、同条件を再定式化する必要がある。

よく指摘されるように、TR 構文の目的語は動詞と結果句双方から意味役割を受けるのに対し、UR 構文のそれは結果句だけから受ける (cf. Carrier and Randall (1992))。さらに TR 構文の目的語名詞句の意味役割は、両事象構造 (行為と結果状態からなる) において既存的参与者となっている。従って TR・UR 両構文における動詞後続名詞句の唯一の相違点は、動詞により表される第一下位事象にある。すなわち TR 構文の場合目的語の指示対象が動詞の記述する事象において既存的参与者となっているが、UR 構文の場合にはそうっていない。そこで(14)の既存性の条件における event の概念を、最小の言語領域が記述する事象、すなわち動詞の語彙概念構造が表す事象と規定する。動詞後続名詞句の既存性を決定する際には、動詞により表される事象における既存性で決定するのである。つまりある構成素の可能な指示対象が「既存的」であるためには (構文全体ではなく) 動詞により表される事象において既存的参与者でなくてはならない。この定義により、TR 構文における目的語の指示対象は既存的、UR 構文におけるそれは非既存的ということになる。この差異が両構文における島からの抜き出しでの差異を生みだす。

(21-24)に見られる TR 構文と UR 構文との差異は次のように説明される。文法的な TR 構文について考えてみると、例えば(21a)におけるテーブルは、拭くという行為のターゲットで

あるため既存的と認められる。よって(21a)の目的語指示対象は「既存的」参与者として(14)の条件を満たし、島の効果は生じない。一方、非文法的な UR 構文における疑似目的語は結果状態においてしか既存的参与者とは認められず、必要とされる動詞記述事象内での既存性は認められない。(22a)の場合、赤ん坊は時計の音がする状況には事象構造上関係がないため非既存的参与者である(起きるという結果状態においては既存的存在である)。従って、疑似目的語は島からの抜き出しにおいて求められる要求を満たしておらず、島から抜き出した場合に非文法性を生じるのである。

再定義した event の概念に基づき既存性の条件を再定式化すると以下ようになる。

(26) Pre-Existence Condition (revised version)

A *wh*-constituent can only be extracted out of a *wh*-island, if it is the type of constituent which refers to an entity which is taken to be *pre-existent*, in the sense defined in (13), with respect to the event described by the verb.

(Nogawa (2001: 53))

Nogawa (2001) で明らかになったことは、抜き出し後の文法性は抜き出される要素の指示対象の既存性によるということである。動詞により既存性が保証されている要素の *wh* 移動では(文法性はやや低下するが)島からの抜き出しが可能であるのに対し、そうでない要素(非既存的参与者と非参与者)の場合では抜き出しは全く不可能である。

4. 考察

本節では、Nogawa (2001) の分析がもつ理論的な意味合いについて考察していく。同分析によれば、動詞(のみ)の記述する事象内で既存的参与者と認知される指示対象を表す構成素のみが、*wh* 島から抜き出せるということであり、そうでない構成素の場合には強い島の効果が現れるということであった。そしてこれは既存性の条件という形にまとめられた。

既存性の条件を考える上で注意すべき点は、その「既存性」という概念がもつ意味である。RO(その他複数の動詞後続要素)の島からの抜き出しにおいて問題となるのは、指示対象が動詞が表す事象の中で既存的参与者となっているのか否かである。つまり抜き出しの可能性を左右する要因は、(動詞自体に)語彙化されている意味特性(そしてそれのみ)に還元されていると言える。言い換えれば、抜き出される要素の指示対象が、行為の遂行される時に果たして現実世界において物理的に「既存」しているか否か、さらには文の発話者がその存在そのものを認識しているか否かは、既存性の決定には全く関与していないのである。つまり島からの抜き出しという統語現象においては、問題となる構成素が物理的レベルでも心理的レベルでもなく、純粋に語彙的なレベルにおいてどのように言語化されているのか、具体的には動詞の語彙概念構造において当該構成素は既存性という(極めて語彙意味的な)特性を備えているのか否かが問題なのである。

その意味でも、Nogawa (2001) における分析は文法理論、特に語彙部門と統語部門との関

係を考える上で重要な意味合いをもっている。というのも、そこから示唆されることは、抜き出し操作のかかる節の動詞が担っている語彙概念構造が、同節における（弱い島からの）抜き出しにおいて一定の機能を果たしているということを含意するからである。つまり、語彙が備えている意味側面、具体的には語彙概念構造に含まれる因子（(非)既存性）がwh島からの抜き出し操作という統語現象に影響を及ぼしていると言える。

これに対し、他のNakau (1981) のような意味論的あるいは認知論的分析を振り返ってみると、いずれも談話レベルにおける分析にとどまっており、そこで指摘されている島の効果を引き起こしている意味的要因は、2.1節でNakau (1981) の分析に関しても触れたように、どれも語彙意味論のレベルのものではないことがわかる。

例えばKuno (1987: 23) においては、抜き出される要素は話題 (topic) を表す、あるいは少なくともその可能性がある (potential topic) ものでなくてはならないとする Topichood Condition for Extraction を提案している⁽¹²⁾。一方、Takami (1989) では抜き出される位置 (抜き出しの起点) に関わる意味的分析を行っているが、そこでもやはり談話レベルの意味概念を用いての分析となっている。Takami (1989) によれば、抜き出しのかかる位置は新情報あるいは「より重要な」情報を担うとしており、言語内レベルではなく言語外レベルの情報に大きく依存しているという点から見れば、基本的にNakau (1981) の分析と軌を一にしていると言える。このようなKuno (1987) とTakami (1989) の両者の分析を統合する形で、Dean (1991, 1992) は次のように述べている。⁽¹³⁾

(27) The extracted phrase and the extraction site command attention simultaneously when extraction can proceed. Potential topic and focus status are the natural means by which this can occur. (Dean (1992: 23))

DeanによればKuno (1987) の分析は、ある構成素が抜き出し可能であるのはそれが際立っており (salient)、よって話題化される可能性がある要素だと再解釈されうる。またTakami (1989) の分析は、抜き出される位置 (起点) は焦点となるような新情報あるいはより重要な情報を担うものであると解釈されうる。

Deanの分析はKunoとTakamiの両分析をいわば統合し、統一的な意味基準により定式化を試みるものであり、抜き出される要素と抜き出される起点の両者に意味的な制約がかかっていることを明らかにした点で非常に興味深い。しかし、Deanの理論においては、POとは対照的にROの島からの抜き出しが常に強い非文法性を示すという事実を分析できない。説明するためには、「結果者目的語はいかなる談話においても常に不活性价態 (inactive) であり、活性价態 (active) あるいは際立った状態 (salient) になることはない」というような非常に不自然な仮定をせずには到底説明のできるものではない。

島の効果の原因を移動要素の痕跡に求めたり、あるいは移動操作自体の特性に求めたりする統語分析においても、島の効果に見られるPO-ROの非対称性を（最低限）説明する必要上、既存性という概念は有効であると考えざるを得ない。従って既存的参与者と非既存的参与者・

非参与者との区別はいかなる理論的な基盤に拠ろうとも有効な対立として必要とされるものと考えられる。

語彙化された意味情報の重要性の他にも、Nogawa (2001) には島の効果の分析に対して示唆するところがある。まず必ず強い島の効果を生み出す島（強い島）と弱い島の効果をも生み出す可能性のある島（弱い島）とを区別し、それぞれに対して異なる観点から分析する必要性があるように思われる。つまり、いわゆる「島の効果」と呼ばれる現象について見た場合、強い島の効果のみが、真の島の効果と言え、弱い島の効果は単に(26)のような意味的制約によるのかもしれない。従って全ての島の効果を同一平面上において分析しようとする考え方は改められるべきなのかもしれない (cf. Fukui (1998))。

5. おわりに

最後に残された問題をいくつか挙げる。まず、既存性という意味概念が島からの抜き出し現象において重要な要因となっていることの理論的な意味合いを明らかにする必要がある。非既存的参与者であっても wh 移動そのものは自由である。にもかかわらず、島からの「抜き出し」となるとその文法性は極端に悪くなる。これは本稿でも見たように移動要素の非既存性のために引き起こされるわけだが、これが意味するところは何か。

さらに Nogawa (2001) での分析や Nakau (1981) や Hirose (2002) の分析を比較してみると、広い意味での「既存性」のような概念が抜き出される要素にもまたそこから抜き出す島自体にも関与していると解釈することも可能であるように思われる。仮にこのような捉え方が正しいとするならば、このことが意味するところを探求していく必要がある。Dean (1992) では Kuno (1987) と Takami (1989) を統一する方向にあったが、そこでの接近法は談話レベルの概念に基づくものであった。我々に必要とされるのは恐らくより語彙レベルに近づいた概念に基づく統一的説明となるものと思われる。

さらに、4 節でも触れた強い島と弱い島との関係も不明瞭なままである。Nogawa (2001) では補部・付加詞の非対称性を生じさせる弱い島の効果しか扱っておらず、PO のような典型的補部でさえ強い島からは抜き出せない「強い島の効果」(subject island, complex NP island, adjunct island などによるもの) は扱っていない。当然強い島から RO を抜き出すことは不可能であるため、PO-RO の非対称性は見られない。従って、強い島の効果の分析および弱い島の効果との比較対照には全く別の方法論が必要となるものと思われる。

最後に、既存性の条件の理論的意味合いを問う必要がある。一つの可能性としては、既存性の概念を語彙概念構造 (LCS) との関係において探るという方法がある。というのも既存性の条件が動詞の概念構造に言及するものとなっているからだ。LCS との関係で、Hale and Keyser (1993, 1997) は動詞の LCS と項構造 (argument structure) との関係づけをする際に統語的接近法を試みている。そして両者を結びつける統語構造として語彙関係構造 (Lexical Relational Structure: LRS) を提案している。Hale and Keyser (1993, 1997) の分析を

理論的基盤とすれば、PO と RO は LRS の異なる位置に基底生成されていることになる。そうであるならば PO-RO (や他の動詞後続構成素) の非対称性は、それぞれの語彙統語上の (lexico-syntactic) 構造上の位置に還元できるのかもしれない。ちなみに、動詞補部の既存性に基づく他の相違点は、島の効果のような統語領域のみならず、意味解釈領域においても見出されている。すなわち空補部 (null complement) の解釈がそれである (Nogawa (1994))。いくつかの例外は認められるものの、基本的に動詞の記述する事象において既存的である指示対象を表す空補部は定 (definite) の、非既存的であるそれを表す空補部は不定 (indefinite) の意味解釈を受けるのである。このことは、動詞の語彙概念構造上に現れる要素の意味素性 (既存性) が様々な言語現象に影響を及ぼしていることを意味すると考えられる。この点についての精緻な分析にはさらなる理論上および経験上の探求が必要であり、今後の研究に委ねたい。

(注)

- (1) 本稿は立命館大学国際言語文化研究所プロジェクト BII「言語と文化研究会：2002年度第4回」(2003年1月23日 立命館大学)での口頭発表 A Semantic Aspect of Extraction に基づいている。児玉徳美氏、佐野真樹氏、星英仁氏をはじめ、参加者の方からコメントをいただいたことに対し、ここに記して感謝の意を表したい。
- (2) 既存性の条件の検証のために本稿で取り上げる抜き出し要素は、被動者目的語、結果者目的語、出来事目的語、被能格動詞結果構文の疑似目的語だけである。他の義務的動詞後続要素で同条件により分析可能なものについては Nogawa (2001) を参照のこと。
- (3) 指示的意味役割の束縛関係は以下の定義 (Rizzi (1990: 86f.)) に基づく。これにより基本的に無制限の長距離移動が保証される。

- (i) a. A referential index must be licensed by a referential theta role.
 b. X binds Y iff
 (i) X c-commands Y
 (ii) X and Y have the same referential index.

他方、統率の鎖は以下のように定義される (Rizzi (1990: 92))。

- (ii) a. (a_1, \dots, a_n) is a chain only if, for $1 \leq i < n$, a_i antecedent-governs a_{i+1} .
 b. X antecedent-governs Y iff
 (i) X and Y are nondistinct
 (ii) X c-commands Y
 (iii) no barrier intervenes
 (iv) Relativized Minimality is respected.

指示的意味役割を担わない wh 要素は wh 島の境界を ECP 違反を引き起こすため全く越えられない。そのため、一回における移動は同一節内の移動に限られる。長距離移動は (段階的 (step-by-step) 移動操作を通して) 統率の鎖が形成される場合のみ可能となる。

- (4) (2), (3) の典型的な補部・付加詞の非対称性は次のように分析される。wh 補部は指示的意味役割を受けており、指示指標の束縛を満たすため長距離の移動が可能である。他方 wh 付加詞は指示的意味役割を受けていない。しかも wh 句が割り込み wh 島を形成しているため、長距離移動を可能にする段階的移動が阻害されている。そのため結果として高い非文法性を示すことになる。

- (5) なお AIC のもつ機能的な動機づけとして、Nakau は次のように述べている。
- (i) Functional motivation for AIC
- The anaphoric NP or S is a semantically frozen unit which syntactically behaves exactly like a name, hence an information unit whose identity is previously established in the universe of discourse. Thus the anaphoric island constitutes an integral part of background information for further communication.
- (6) Nakau (1981) では AIC と Anaphoric Marking は以下のように定式化されている。
- (i) Formulation of AIC as a semantic filter
- No movement rule can involve both X and Y in the structure:
- ... Y ... [α ... X ...] ...Y...
- where (i) [α ... X ...] is distinct from [α X].
- (ii) α is either an NP or S (S') which is anaphoric.
- (iii) X is a trace which has the same index as Y.
- (7) 以下での議論においては弱い効果を引き起こす島に限る。島の効果が強い島（強い島）では、その効果が強すぎるため全ての抜き出し操作が非文法的となり、結果として抜き出される要素にかかる制約（3 節で明らかとなる）が特定できなくなるためである。
- (8) Nogawa (2001) は wh 島を対象とするデータに基づいているが、同様の文法性における差異は、否定の島 (negative island) の効果においても見られる。その場合、より大きな差異が観察される。
- (i) a. What_t didn't Mary paint t_i? [PO]
 b. ?*What_t didn't Mary paint t_i on the ceiling? [RO]
- (ii) a. What_t didn't John dig t_i? [PO]
 b. ?*What_t didn't John dig t_i in the ground? [RO]
- (9) 言うまでもなくここでの分析は、(純粋な) 付加詞の島からの抜き出しが高い非文法性を示す事実 ((2, 3)) をも説明できる。付加詞は既存的参与者の意味役割を担っておらず、従って島からの抜き出しは非文法的となる。
- (10) TR 構文の動詞は後続する名詞句に対する対格付与能力、および意味役割付与能力があるのに対し、UR 構文のそれは (結果構文ではない単独使用の場合) 対格付与能力も意味役割付与能力もない。
- (11) TR 構文と UR 構文とでは、動詞後続要素の wh 島からの抜き出し操作の他にも中間態形成、形容詞受け身形成、プロセスの名詞化のような統語操作の適用においても差異が認められる (Carrier and Randall (1992), Rothstein (1992))。
- (12) Kuno (1987) の Topichood Condition for Extraction は以下のように定義されている。
- (i) *Topichood condition for extraction*: Only those constituents in a sentence that qualify as the topic of the sentence can undergo extraction processes (i.e., *Wh-Q* Movement, *Wh-Relative* Movement, *Topicalization*, and *It-Clefting*.) (Kuno (1987: 23))
- (13) Dean (1991: 30) では、島からの抜き出しが文法性における悪さを引き起こす背景について言及されている。

参考文献

- Carrier, Jill and Janet H. Randall (1992) "The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives," *Linguistic Inquiry* 23, 173-234.
- Dean, Paul. D. (1992) *Grammar in Mind and Brain: Explorations in Cognitive Syntax*, Mouton de Gruyter.

- Hale, Kenneth and Samuel J. Keyser (1993) "On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relation," *The View from Building 20*, ed. by Kenneth Hale and Samuel J. Keyser, 53-109, MIT Press.
- Hale, Ken and Jay Keyser (1997) "On the Complex Nature of Simple Predicators," *Complex Predicates*, ed. by Alex Alsina, Joan Bresnan, and Peter Sells, 29-65, CSLI, Stanford.
- Kuno, Susumu (1987) *Functional Syntax*, Harbard University Press.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations*, University of Chicago Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press.
- Levin, Beth and Tova R. Rapoport (1988) "Lexical Subordination," *CLS* 24, 275-289.
- Nakau, Minoru (1981) "Extraction and Semantics," m.s., University of Tsukuba.
- Nakau, Minoru (1989) Handouts for class lectures. University of Tsukuba.
- 中右 実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館.
- Nogawa (1994) "On Interpretations of Implicit Complements," *Tsukuba English Studies* 13, 95-116.
- Nogawa (2001) "A Semantic Account of Island-Extraction," *English Linguistics* 18: 1, 32-56.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press.
- Roberts, Ian (1988) "Thematic Minimality," *Rivista di Grammatica Generativa* 13, 111-137.
- Ross, Haj (1984) "Inner Islands," *BLS* 10, 258-266.
- Rothstein, Susan D. (1992) "Case and NP Licensing," *Natural Language and Linguistic Theory* 10, 119-139.
- Takami, Ken-Ichi (1989) "Preposition Stranding: Arguments against Syntactic Analyses and an Alternative Functional Explanation," *Lingua* 76, 299-335.